

第4巻1号 2022年3月

秀明大学看護学部紀要

Journal of Faculty of Nursing

実践報告

看護倫理を学ぶ科目に国立ハンセン病資料館オンライン見学を導入して
－授業準備と学修効果に焦点を当てて－

片桐いずみ・石津仁奈子・村中 陽子・飯村 直子・門川由紀江・
吉田 聡・藤原佳代子・茨城 亜紀・茅島 江子

 秀明大学看護学部

Shumei University Faculty of Nursing

 実践報告

 秀明大学看護学部紀要
 P.11-19 (2022)

 看護倫理を学ぶ科目に国立ハンセン病資料館オンライン見学を導入して
 - 授業準備と学修効果に焦点を当てて -

 Introduction of the Online Tour of the National Hansen's Disease Museum to a Course
 on nursing Ethics

- Focusing on class preparation and learning effectiveness -

 片桐いずみ¹⁾ 石津仁奈子¹⁾ 村中陽子¹⁾ 飯村直子¹⁾ 門川由紀江¹⁾
 Izumi Katagiri Ninako Ishizu Yoko Muranaka Naoko Imura Yukie Kadokawa

 吉田 聡¹⁾ 藤原佳代子¹⁾ 茨城亜紀¹⁾ 茅島江子¹⁾
 Satoshi Yoshida Kayoko Fujiwara Aki Ibaraki Kimiko Kayashima

要 旨

COVID-19(新型コロナウイルス)感染拡大下において、看護倫理を学ぶ科目に国立ハンセン病資料館のオンライン見学を導入した。研究目的は、授業準備を振り返り、授業方法・内容が効果的な教育方法であったかを検討することである。履修学生30名のリフレクションシートに記載された内容を分析した結果、【オンライン見学で学修の広がり(見方・考え方)や倫理観の深まりを実感した】、【次世代に向け自分がなすべきことを考えた】、【患者と家族への不当な差別・偏見の実態がわかった】、【患者の人権・尊厳が侵害されていたことがわかった】、【今では考えられないようなハンセン病の過去の事実を知った】、【過酷な環境下でも患者の自分らしく生きる姿に感動した】、【当事者や家族と同じ立場に立って思考した】の7カテゴリーを抽出した。以上の結果から、学生は見学前学修を積み上げ、オンライン見学を実施することで学修目標は達成されたと判断出来る。さらに学生は、相手の立場に立ち、今後自分には何が出来るか思考を巡らせ、学修がより深まり広がる体験を実感していた。

キーワード：看護倫理、オンライン見学、授業準備、学修効果

Key Words：nursing ethics, online tour, class preparation, learning effectiveness

I. はじめに

本学部において看護倫理を学ぶ科目の一つに「総合教養演習Ⅲ」がある。これは2年次前期に開講され、全15回、1単位の授業科目である。この科目のねらいからアカデミック・スキルの修得と倫理的態度の修得を中核として、全15回の授業のテーマを設定している。本科目については、2018年度(開講初年度)に「看護学の基礎分野『総合教養演習Ⅲ(倫理観)』におけるアクティブラーニングの授業設計」¹⁾および2019年度に「アカデミック・スキルの修得を目

指した教養ゼミでの授業設計に関する交流セッションの開催」²⁾と題して報告をしてきた。これまでの報告から、総合教養演習Ⅲでは学生の主体的・対話的で深い学びや、アカデミック・スキルの修得と看護の学びの融合を目指し、様々な教授方法を取り入れてきたことで、学生の学修効果が高まったということが明らかになっている。

そこで、総合教養演習Ⅲでは、2019年度から知識と実際を関連付けて学修内容を確かなものにするために、学外教育活動(国立ハンセン病資料館および国立療養所多摩全生園見学、元ハンセン病患者の講話聴講)を取り入れた。

その際、学生らは熱心にメモを取り、講話聴講や資

1) 秀明大学看護学部

1) Faculty of Nursing, Shumei University

料館を見学する姿が見られた。そして、見学後のリフレクションでは、「ハンセン病患者への偏見と差別について事前に授業で学んでいたが、実際の場に行って改めて肌で感じる事が出来た」「ハンセン病について元々持っていた知識をより深める事が出来、さらに新たな知識を得ることが出来た」等の記載があった。このように学生は、学外教育活動を通して、事前学修による知識と実際とを関連付けて考え、既習の知識を深め、新たな知識を得るという学修の広がりを経験していた。学外教育活動による学生の反応や学修評価から、学外教育活動を取り入れたことによる学修効果が認められ、今後も継続して行っていくこととなった。

しかし2020年、世界中にCOVID-19の感染が拡大し緊急事態宣言が発令された。本大学においては、授業開始時期の延長及び遠隔授業へと授業形態が変更となった。さらに、国立療養所多摩全生園及び国立ハンセン病資料館においても、団体見学の受け入れが中止されている状況であった。そのため、2020年度は学外教育活動の中止を余儀なくされた。したがって、本年度も実際の見学の実施は困難な状況であった。

倫理教育について概観すると、日本看護協会では、

1988年に看護職の行動指針として「看護師の倫理規定」を作成した。その後2003年に内容を改定、更に社会情勢や時代に応じて、2021年3月に「看護職の倫理綱領」³⁾を公表した。このことから、看護師にとって倫理観は看護の根底を成すものであることがわかる。看護学生にとっても同様で、看護倫理を学ぶことは、将来の看護師としての倫理観の基盤形成となり得るため非常に重要だと言える。したがって、COVID-19感染拡大下であっても、倫理についてのより現実的な学修機会を確保することが重要であると考えた。そこで、国立ハンセン病資料館でオンライン団体見学プログラムを実施していることを知り、授業に導入した。

授業の第1回から第4回までは、ハンセン病に関する倫理的課題について、見学前学修を積み重ねていき、第5回に国立ハンセン病資料館のオンライン見学を実施した。そして、第6回には、第5回までの学修内容を基に、広義及び医療者の立場において、ハンセン病患者の尊厳と権利の擁護についてのグループの考えをプレゼンテーション資料として作成した。そして、第7回から第15回では、学生の興味のある倫理的課題

表1. 2021年度総合教養演習Ⅲ授業計画

回	学修目標・学修内容	内容
1	「倫理について考えるための導入：ハンセン病、その他さまざまな倫理的課題について」の講義を通して、授業の目的・方法・評価について理解する。 ①2021年度「総合教養演習Ⅲ」授業計画 ②講義資料	講義
2	配信された動画の視聴（ハンセン病資料館による限定公開）を通して、今日、人々の尊厳と権利が脅かされている倫理的課題について知り得たこと、疑問に感じたこと、理解したこと、考えたこと等を明らかにする。	動画視聴
3	1) 第1・2回授業内容に基づきハンセン病について自分が感じたこと、関心を持ったことを列挙する。 2) ハンセン病患者の尊厳と権利を擁護することに関して、過去から未来に向けて自分たちは何を知るべきなのかについて、グループで話し合い、目標に向けて、必要な文献や資料を収集する。	文献 検索 グループワーク
4	第3回授業の継続で、情報収集し、収集した文献や資料に記載されていることを解釈する。	文献 検索 グループワーク
5	国立ハンセン病資料館のオンライン見学を通して、ハンセン病患者の実態を知り、当事者の立場で人間の尊厳や権利についての考えを深めることができる。	見学
6	第5回までの学修内容を基に、広義及び医療者の立場において、ハンセン病患者の尊厳と権利の擁護についてのグループの考えをプレゼンテーション資料として作成する。	グループワーク
7～ 15	第7回～第15回では、学生の興味のある倫理的課題について情報収集、文献検討、グループワークを行い、プレゼンテーション資料を作成し発表した。	発表

について情報収集、文献検討、グループワークを行い、プレゼンテーション資料を作成し発表した。(表1)

また、オンライン見学における研究の動向を把握するために、遠隔における看護教育について医中誌Webを使用し、キーワード「看護」「教育」「遠隔」、看護文献に限定し会議録を除く先行研究を調べたところ(2021年11月5日現在)オンライン実習に関する文献^{4) 5) 6) 7) 8) 9) 10) 11) 12) 13) 14)}が最も多く、対面授業と非対面授業の比較に関する文献^{15) 16)}、オンライン授業に関する文献^{17) 18) 19) 20) 21)}等があった。また、オンライン授業に関する文献の中に、看護倫理の授業を遠隔と対面のハイブリット型で実施した¹⁷⁾という文献はあったが、看護倫理を学ぶ授業に学外教育活動としてオンライン見学を取り入れたという報告は認められなかった。したがって、本研究の報告は、看護倫理教育の新たな教授法の1つとして意義のあるものになるのではないかと考える。

本研究では、倫理科目に新たに導入したオンライン見学の授業準備と学修効果に焦点を当て、授業方法・内容が効果的な教育方法であったかについて検討することを目的とする。

II. 国立ハンセン病資料館オンライン見学の授業準備について

オンライン見学を実施するに伴い、国立ハンセン病資料館(以下資料館)への申し込みや打ち合わせを早い段階から行い、担当者との連絡を密に取り当日に備えた。概要を以下に示す。

1. 国立ハンセン病資料館担当者との連携

オンライン見学実施までのプロセスは、以下の通りである。

- 1) 2021年2月上旬、資料館にオンライン見学内容を確認し申し込み
- 2) 4月上旬、資料館の本学オンライン見学担当者(以下担当者)が決定し、授業概要を送付し、授業のねらいを考慮した見学内容となるように依頼
- 3) 4月下旬、緊急事態宣言が延長された場合の内容変更について、電話相談
- 4) 緊急事態宣言延長に伴い、当初予定していた見学方式の変更(担当者が施設の中を移動しながら説明するオンラインライブ形式での実施が困難となり資料館内の展示物の写真を多用したス

ライドを用いながら説明する方法へ変更)

- 5) 5月初旬、担当者と担当教員3名でZoomにて最終事前打ち合わせ(音声・画像確認・通信トラブル時の対応等について確認)

2. 見学前学修について

第1回では、「倫理について考えるための導入としてハンセン病、その他さまざまな倫理的課題について」の講義を行った。続いて、第2回では、国立ハンセン病資料館による限定動画を通して、今日、人々の尊厳と権利が脅かされている倫理的問題について知り得たこと、疑問に感じたこと、理解したこと、考えたことなどを明らかにした。

限定動画は以下の通りである。1)、2)は授業中に各自視聴する時間を設け、3)は参考動画としてGoogle Classroom上に添付した。

- 1) ハンセン病を知っていますか? : 15分
- 2) 柵の向こう側 ハンセン病患者・回復者の歩み : 40分
- 3) 語り部講演記録映像(看護学生編~命と心の教育) : 40分

第3回では、第1回・第2回授業内容に基づきハンセン病について自分が感じたことや関心を持ったことを列挙し、ハンセン病患者の尊厳と権利を擁護することに関して、過去から未来に向けて自分たちは何を知るべきなのかについて、グループで話し合い、目標に向けて、必要な文献や資料を収集した。第4回では、第3回授業の継続で、情報収集し、収集した文献や資料に記載されていることを解釈した。また、オンライン見学前に、資料館からいただいた資料を配布した。配布資料は以下の通りである。

- 1) 正しく学ぼう!!ハンセン病Q & A
- 2) 全生園の散歩道「人権の森と史跡」めぐり
- 3) 国立ハンセン病資料館
- 4) 国立ハンセン病資料館 資料館だより 2021. 1. 1 No.110 (季刊)
- 5) キミは知っているかい?ハンセン病のこと。
- 6) 一希望ある明日へ向けて一 知ってほしい、ハンセン病のこと。
- 7) ハンセン病の向こう側

3. 当日の実施要領

当日の学修目標は、シラバスに沿って「国立ハンセン病資料館のオンライン見学を通してハンセン病患者

の実態を知り、当事者の立場で人間の尊厳や権利についての考えを深めることができる」であった。その学修目標の到達に向け、オンライン見学実施要領(表2)を作成し、担当者と構成を組み立てた。また、当日の通信障害により受講が出来ない学生や、担当者側の通信障害により、講義自体が中断される可能性を考慮し、以下の対策を講じた。

- 1) 事前にオンライン見学で使用する資料を送付し

てもらい、通信障害時に教員側で資料を提示する準備

- 2) 資料館側と大学側の Zoom 共同ホスト体制
- 3) 自宅から受講する学生の通信障害に備え、学生対応の教員を1人配置
- 4) 受講が出来なかった学生が、後日視聴が出来るように、担当者の許可を得て録画

表2. 「ハンセン病資料館オンライン見学」実施要領

<学修目標> 国立ハンセン病資料館のオンライン見学を通して、ハンセン病患者の実態を知り、当事者の立場で人間の尊厳や権利についての考えを深めることができる。			
<開催概要> 日時：2021年5月19日(水)13:00～14:10 場所：学生自宅、教員研究室			
<参加者> 看護学部学生 2年生43名(Zoomによる参加) 教員9名			
<当日のタイムテーブル>			
時間	全体の流れ	役割分担	
12:40	パソコン準備、打ち合わせ等	司会進行： 教員A	共同ホスト：教員A, B 学生対応：教員C 施設対応：教員A
12:50	共同ホスト担当教員入室：教員A, B	学生の出席確認	
13:00 ～14:10	国立ハンセン病資料館 オンライン見学 (見学+質疑応答等)	・遠隔操作の不具合に対応 ・通信障害時の対応 ・録画	
<学生対応> ・当日の流れについて Google Classroom で事前配信する (Zoom アドレス、集合時間、欠席等) ・通信トラブル時は、Google Classroom にて対応する ・当日は学生担当の教員を1人配置 (映像を録画し、トラブルで Zoom に入れなかった学生対応) ・学生の出席確認方法 (Google Classroom と Zoom 内で確認) ・共同ホストを立て、担当者の通信トラブル時は、事前に送信された資料を共有操作する			

Ⅲ. 当日のオンライン見学の内容

オンライン見学の内容は以下の通りである。

- 1) スライドを用いた資料館内の展示物の紹介
- 2) 今でも続く元ハンセン病患者への差別に関する事件について
- 3) 担当者自身の体験談
- 4) 質疑応答
- 5) 看護学生へのメッセージ

見学を通して、ハンセン病患者の実態を知り、当事者の立場で人間の尊厳や権利についての考え」について記載された文節を全て抽出しコード化した。次に、コードの意味内容を確認しながら、類似した内容を集めて分類し、名称を付けてサブカテゴリー化した。さらに、類似した内容を集めて分類し、カテゴリー化した。また、分析結果の妥当性の確保のため、分析全般にあたり質的研究に精通した研究者から助言を得て研究者3人で分析を行った。

Ⅳ. 学修効果について

1. 分析データと分析方法

対象者は、総合教養演習Ⅲを履修した看護学部2年生とした。対象者のレディネスとして、昨年より遠隔講義を経験している看護学生であった。また、対象者43名中、同意が得られた30名(全体の69.8%)のリフレクションシートの記述内容を分析した。

分析方法は、オンライン見学後に提出されたリフレクションシートの記述内容から「資料館のオンライン

2. 倫理的配慮

本論文は授業設計についての報告であり、人を対象とする調査研究や介入研究ではないため倫理審査の対象にならない。しかし、学生の学修効果を報告するにあたり、学生が提出したリフレクションシートの記載内容を活用するためには学生の下承が必要である。

そこで、今回の授業評価が確定した後に、履修学生に BCC メールを用い、1) 実践報告として本学紀要

への投稿を考えていること、2) 論文にリフレクションシートの内容の一部を紹介する可能性があること、3) 協力しなくても成績には全く関係ないことを伝え、自由意思に基づいて協力の承諾を得た。

3. 結果

記述内容の分析結果を表3に示す。リフレクションシートから162のコードが抽出され、21サブカテゴリ、さらに、7カテゴリが生成された。以下、本文中のカテゴリを【 】, サブカテゴリを〔 〕、象徴するコードを“ ”で示す。

コード数の多い順にカテゴリを見ていくと、【オンライン見学で学修の広がり(見方・考え方)や倫理観の深まりを実感した】に分類されたコードが42と最も多かった。それは、〔事前学修よりもさらに学修が深まった〕、〔新たな知識を得た〕等のサブカテゴリで構成された。象徴するコードは、“これまでの授業で見てきた動画等での学修よりもさらにハンセン病患者の実態を学ぶことができた”、“ネットでの文献検索では限界があったので今回資料館の方のお話を聞いて良かった”等であった。

次いで、【次世代に向け自分がなすべきことを考えた】は、〔自分達が次世代へ正しい知識を広めていくことが大切〕、〔未来に向けて自分たちに出来ることを考えた〕等のサブカテゴリで構成された。象徴するコードは、“今の自分たちに出来ることは多くの人に

ハンセン病は治る病気であることを知ってもらうことだと改めて感じた”、“自分や他人の存在を認め合っていくことが今の私たちに出来ることであり、必要なことだと学んだ”等であった。

3番目の【患者と家族への不当な差別・偏見の実態がわかった】は、〔患者と家族への不当な差別の実態を知った〕、〔現在もなお不当な差別や偏見が続いていることを知った〕等のサブカテゴリで構成された。象徴するコードは、“ハンセン病患者さんは差別や偏見によって自分らしい生き方が出来なかったことを知った”、“人目に出た時に指を隠したり等本来の自分を発揮できない人もいると知り差別や偏見の壁はまだまだなくなっていないと改めて感じた”(学生のリフレクションシート原文記載)等であった。

4番目の【患者の人権・尊厳が侵害されていたことがわかった】は、〔強制的な不妊手術や子どもの人権まで奪われていたことを知った〕、〔国の誤ったひどい政策について考えた〕等のサブカテゴリで構成された。象徴するコードは、“人間として扱われていないことが患者にとって、とてもつらいことであつたらうなと思った”等であった。

5番目の【今では考えられないようなハンセン病の過去の事実を知った】は、〔劣悪な療養所生活の実態を知った〕、〔思いもよらない当時の医療体制を知った〕のサブカテゴリで構成された。象徴するコードは、“特に印象に残った部分は療養所の画像を見た時に、

表3. リフレクションシートの内容(コード数の多い順)

カテゴリ(総コード数)	サブカテゴリ(総コード数)
オンライン見学で学修の広がり(見方・考え方)や倫理観の深まりを実感した(42)	事前学修よりもさらに学修が深まった(17)
	新たな知識を得た(12)
	オンライン見学前後の知識の違いを認識した(8)
次世代に向け自分がなすべきことを考えた(34)	学修意欲が高まった(5)
	自分たちが次世代へ正しい知識を広めていくことが大切(10)
	未来に向けて自分たちに出来ることを考えた(8)
患者と家族への不当な差別・偏見の実態がわかった(27)	どのような病気や障害があっても共に生きられる社会を作ることが重要(8)
	看護師に必要な力を認識した(6)
	過去の事実を絶対に忘れてはならない(2)
患者の人権・尊厳が侵害されていたことがわかった(23)	患者と家族への不当な差別の実態を知った(9)
	現在もなお不当な差別や偏見が続いていることを知った(7)
	差別や偏見を受けてきた患者の辛い思いを考えた(6)
今では考えられないようなハンセン病の過去の事実を知った(23)	周囲の目を気にしながら生活し続ける患者の思いを考えた(4)
	正しい知識がないことで差別や偏見が起こったことを知った(1)
	強制的な不妊手術や子どもの人権まで奪われていたことを知った(11)
過酷な環境下でも患者の自分らしく生きる姿に感動した(9)	国の誤ったひどい政策について考えた(10)
	人としての尊厳が奪われていたことを知った(2)
	劣悪な療養所生活の実態を知った(17)
当事者や家族と同じ立場に立って思考した(6)	思いもよらない当時の医療体制を知った(4)
	過酷な環境下でも患者の自分らしく生きる姿に感動した(9)
	当事者や家族と同じ立場に立って思考した(6)

堀の中で全て人生が完結するように作られていた部分である”等であった。

6番目の【過酷な環境下でも自分らしく生きる姿に感動した】と7番目の【当事者や家族と同じ立場に立って思考した】は単一のサブカテゴリーで構成された。

V. 考察

1. 授業準備について

今回新たな試みとして、オンライン見学を授業に取り入れたが、当日は履修学生全員が通信障害なく円滑に受講出来た。鳥越らの研究では、非対面授業の難しい・やりにくい点の一つとしてオンラインシステムの利用に関する問題²²⁾を挙げている。また、宮越らの研究では、遠隔授業を行う際は、システムを円滑に運用し履修生のシステムへの不慣れや抵抗感を解消することが、遠隔授業における重要な課題である²³⁾とされている。

本授業の履修学生は、昨年度から遠隔授業を受講しており、システムの不慣れや抵抗を感じる学生は少ないと思われるが、オンライン見学という普段と異なる授業形態への不安や通信障害が生じる可能性も考え、不測の事態に備えた対応やサポート体制を取ったことが、当日のスムーズな進行につながったと考える。緊

急事態宣言の延長によって、リアルタイムで担当者が資料館内を回りながら見学するというオンライン見学が困難になり、担当者の自宅からスライドを用いて資料館内の展示物を説明するといった見学形式へと変更になった。しかし、事前に見学内容について本学の目的と照らし合わせ担当者と十分に協議したことで、スライドは見学目的を反映した内容になっていた。今回このような不測の事態に応じ、臨機応変な対応が出来たことは、担当者との密な連絡により良好な関係性が築けたことに起因すると考える。したがって、オンライン見学の授業準備として特に重要視すべきは、通信障害への対応の事前準備及び担当者との見学に向けての十分な打ち合わせによる見学内容の精選と考える。

2. オンライン見学の学修効果について

学生のリフレクションシートの記述内容から7つのカテゴリーが抽出され学修効果が明らかになった。この結果は、学修目標の達成につながり、さらなる学修効果が得られたことを示唆している。以下、学生の学びを教授方略と対比させて、学びの構図として図1に示した。これによって、見学前学修を積み重ねたことによって得られた知識・気付きは、オンライン見学によって、他者理解・共感へと発展していった。

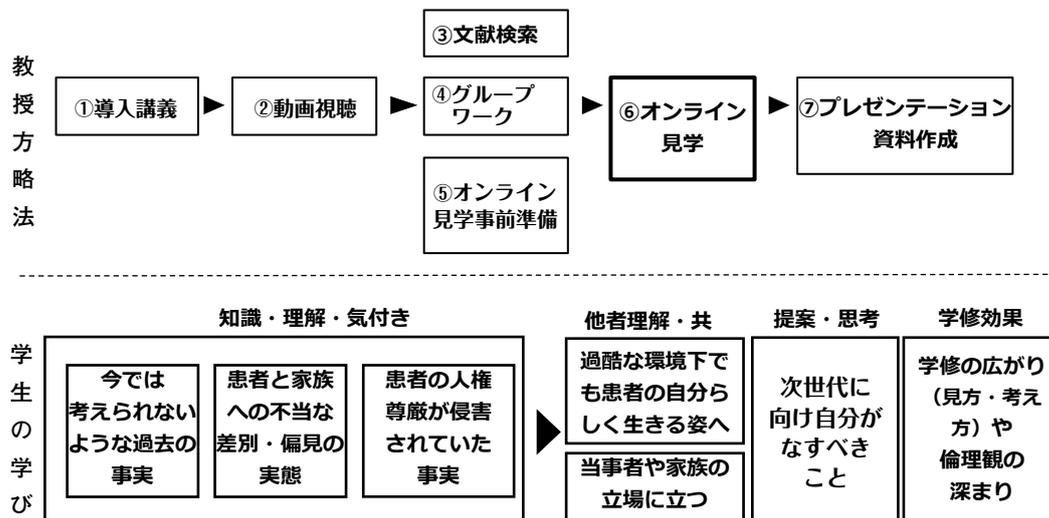


図1. 学びの構図

まず、第1回目の授業（①導入講義）では、倫理について考えるための導入としてハンセン病や、その他の倫理的課題について講義を行った。この講義を通して、ハンセン病という病気を知らなかった学生がハンセン病の歴史を学び、今では考えられないような過去の事実を知り、健康は誰のものかということについて

考えた。学生の学びとして、導入講義があったからこそ、ハンセン病への興味・関心や倫理的課題に目を向けることが出来たのではないかと考える。

また、第2回授業（②動画視聴）では、資料館から送付された事前学修用の限定動画を視聴した。そこで、学生は元ハンセン病患者の語りから当時のハンセン病

患者の生活を聞くことで、尊厳と権利が脅かされている倫理的問題について知り、患者と家族への不当な差別・偏見があったことを認識したのではないかと考える。

第3回および第4回授業(③文献検索、④グループワーク、⑤オンライン見学事前準備)では、それまでの授業内容に基づき、ハンセン病患者の尊厳と権利の擁護に関して、過去から未来に向けて自分たちは何を知るべきかについて、必要な文献や資料を収集し、グループで話し合い、さらにオンライン見学前に配布された資料を用いて、見学前事前学修を行った。これらの学修によって、学生は自分達が関心の持った事柄について自主的に学修し、グループで話し合うことで、ハンセン病患者の人権・尊厳が侵害されていた事実を深めることが出来たと考える。したがって、先述した①から⑤までの見学前学修により、学生はハンセン病に関する知識を修得し、理解を深め、過去の事実や差別・偏見の実態に気付くことにつながったと考える。

そして、第5回授業(⑥オンライン見学)では、資料館担当者から元ハンセン病患者と外出した際のエピソードや、担当者自身が資料館で勤務する際に周囲の偏見があったこと等の実体験を交えた話があった。オンラインではあるが、実体験を直接聞くということで、学生からは、“人目に出た時に指を隠したり等本来の自分を発揮できない人もいと知り差別や偏見の壁はまだまだなくなっていないと改めて感じた”(学生のリフレクションシート原文記載)等の感想があった。このような感想から、学生は机上で行った見学前学修の学びを、本当に起こっていたこととして実感し、真に理解することが出来たと推察される。

また、リフレクションシートの記述内容を分析すると、【自分や家族と同じ立場に立って思考した】、【次世代に向け自分がなすべきことを考えた】、【オンライン見学で学修の広がりや深まりを実感した】というカテゴリーが抽出された。この結果から、担当者から直接話を聞くことや、写真を通して展示物を見ること、そして双方向に質疑応答したことで、学生の感情が揺り動かされ他者への共感や理解が深まっていったと考える。そして、最終的には、次世代に向けて今後自分たちに何が出来るかという具体的な提案にまで思考が広がり、“これまでの授業で見てきた動画等での学修よりもさらにハンセン病患者の実態を学ぶことができた”等と感じていたように、オンライン見学による学修の広がり(見方・考え方)や倫理観の深まりを学生

自身が実感出来ていたことがうかがえる。

したがって、看護倫理教育を行うにあたり、様々な教授法を効果的に取り入れることで、見学前学修では抽象的で、過去のものとして捉えていた事柄が、オンライン見学後には、より具体的なイメージ形成につながったと考える。また、実際に見る、聞くといったオンライン見学を行うことで、過去の事実を目の当たりにし、他者理解・共感の気持ちや次世代に向け自分たちに何が出来るかという提案・思考まで発展していったと考える。

医の歴史の史実を倫理科目に取り入れた授業における学生の学びとして、毛利の研究では、「学生のイメージが形成され、自己の認識を深めていくことが「倫理観」を抽象的なものではなく、事実とつなげながら捉えられ、専門職としての倫理観の形成をより豊かにしていくものと考えられた。」²⁴⁾と述べている。まさに今回の授業では、ハンセン病の歴史から学修を丁寧に積み重ねてきたことで、先行研究と同様の結果が得られたのではないかと考えられる。

第6回目授業(⑦プレゼンテーション資料作成)では、見学前学修やオンライン見学での学びをグループでまとめた。①から⑥までの学修成果を作成するという作業は、各グループ、様々な視点からまとめるという判断力や表現力の向上につながったと言える。

清塚²⁵⁾によれば、価値観が多様化している現代社会において、看護職を目指す学生の価値観も多様化しており、そうした対象に倫理教育をするためには、1つのアプローチ法ではなく、複数のアプローチ法を組み合わせ、教育を行うことが求められると言われている。したがって、オンライン見学単独ではなく見学前学修からオンライン見学、そしてオンライン見学後のプレゼンテーション資料作成という複数の教授法を取り入れたことが学生の学修効果を高めたと考えられる。

総合教養演習Ⅲでは、これまでに学外教育活動として学会への参加、国立ハンセン病資料館及び国立療養所多摩全生園見学、そして今回のオンライン見学等多様な教授法を取り入れてきた。今後も様々な状況に応じ、多様な教授学修方略の中から幅広い選択が出来るようにさらなる教授学修方略の探求を続けていくことが肝要であると考えられる。また、それぞれの学修効果をより明らかにするためには、学修前後の学生の反応を分析していくことが今後の課題である。

Ⅵ. おわりに

本研究では、倫理科目に新たに導入したオンライン見学の授業準備と学修効果に焦点を当て、授業方法・内容が効果的な教育方法であったかについて検討することを目的として、学生のリフレクションシートを用い記述された内容を分析した。その結果、見学前学修を積み上げ、オンライン見学を実施することで学修目標は達成されたと判断出来る。さらに学生は、相手の立場に立ち、今後自分には何が出来るか思考を巡らせ、学修の広がり（見方・考え方）や倫理観の深まりを体験していたことが明らかになった。したがって、本研究報告は、看護倫理教育の新たな教授法の1つとして意義のあるものではないかと考える。

本研究の限界として、今回はオンライン見学前学修の学生の反応を分析するまでには至らなかった。今後の課題として、様々な状況に応じ、多様な教授学修方略の中から幅広い選択が出来るようにさらなる教授学修方略の探求を続け、それぞれの学修効果をより明らかにするために学修前後の学生の反応を分析していくことが必要である。

Ⅶ. 利益相反：開示すべき COI はない

引用文献

- 1) 村中陽子, 飯村直子, 齊藤泰子, 他: 看護学の基礎分野「総合教養演習Ⅲ(倫理観)」におけるアクティブラーニングの授業設計, 秀明大学看護学部紀要, 1(1), 73-80, 2019.
- 2) 柴野裕子, 村中陽子, 飯村直子, 他: アカデミック・スキルズの習得を目指した教養ゼミでの授業設計に関する交流セッションの開催, 秀明大学看護学部紀要, 2(1), 53-56, 2020.
- 3) 公益社団法人日本看護協会(2021. 3.16) 看護職の倫理綱領
< https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/rinri/code_of_ethics.pdf (nurse.or.jp) > .
- 4) 村上真理, 川崎裕美, 藤本紗央里, 他: 新型コロナウイルス感染症拡大期に助産学生のためのオンライン訪問実習に協力した子育て中の助産師の認識: 質的記述的研究, 日本職業・災害医学会会誌, 69(4), 180-184, 2021.
- 5) 近藤美保, 遠藤りら, 長澤利枝, 他: オンラインで行う精神看護学実習の事例検討による効果評価, 精神科看護, 48(8), 62-70, 2021.
- 6) 田中陽子, 松本泉美: 産業保健実習における ICT 遠隔特定保健指導を経験した看護学生の学びのプロセス 複線径路・等至性アプローチを用いた分析, 畿央大学紀要, 18(1), 29-36, 2021.
- 7) 佐野ちひろ, 奈古由美子: 在宅看護学における応用実践力の向上に向けた取り組み with COVID-19, 大和大学研究紀要, 7, 45-46, 2021.
- 8) 岡田麻里, 片山陽子, 諏訪亜希子: 対話型オンライン学修を用いた在宅看護学実習の取り組みと評価: COVID-19 感染予防対策を契機に実装した教育システム発展のために, 香川県立保健医療大学雑誌, 12, 57-65, 2021.
- 9) 上田恵, 稲葉弥恵子: 2020 年度助産学実習における助産学生の社会人基礎力の変化(第1報) オンライン実習および学内実習を通して, 大和大学研究紀要, 7, 9-15, 2021.
- 10) 和田恵美子, 武田未央, 内貴千里: 新型コロナウイルス感染拡大下の在宅支援論実習一遠隔実習の試み一, 京都看護, 5, 37-45, 2021.
- 11) 渡部幸子, 大澤豊子, 谷口友子: Covid-19 禍における保健師学生の模擬健康教育の実践報告一市町村実習を臨地実習から学内実習に変更して一, 了徳寺大学研究紀要, 15, 49-59, 2021.
- 12) 山口裕子, 村瀬美香, 松本佳代, 他: 臨地実習時間の短縮に伴う動画を用いた学内実習における教育方法についての報告: 在宅看護実習での学生アンケート結果から, 熊本保健科学大学研究誌, 18, 103-115, 2021.
- 13) 早瀬麻子, 木下純子, 田尻后子: オンラインでの母性看護実習における学習効果, 保健医療技術学部論集, 15, 29-44, 2021.
- 14) 桑村淳子, 栗原明美, 中林菜穂, 他: 成人看護学Ⅱ(慢性期)のオンライン実習における学習効果と課題～実習後のアンケート調査結果より～, 順天堂保健看護研究, 9, 58-65, 2021.
- 15) 山崎尚美, 杉本多加子, 上仲久: 老年看護学における新しい授業形態のあり方一対面授業と非対面授業のルーブリック評価による比較検討一, 畿央大学紀要, 18(1), 69-78, 2021.
- 16) 林有学, 中西恵理, 須藤聖子, 他: 基礎看護学におけるルーブリック評価の実践 一非対面と対面の授業形態の違いによる比較一, 畿央大学紀要, 18(1), 63-68, 2021.

- 17) 矢吹明子, 須賀京子: 看護基礎教育課程における「看護倫理」の授業の効果と課題, 朝日大学保健医療学部看護学科紀要, 7, 32-38, 2021.
- 18) 中森美季, 山本典孝, 高橋康子, 他: コロナ禍の同時双方向型遠隔授業における看護系大学生の受講状況の実態 学年別の比較, 京都看護, 5, 15-24, 2021.
- 19) 廣瀬允美, 石塚淳子, 小元まき子, 他: 実技を伴う授業(生活援助技術)におけるオンラインによるリアルタイムの授業の試み, 順天堂保健看護研究, 9, 52-57, 2021.
- 20) 呉地祥友里, 大城明枝, 瑞慶覧梢, 他: 看護師養成所におけるオンライン授業 本校の現状と課題, 沖縄県看護研究学会集録, 35, 116-119, 2021.
- 21) 近藤奈緒子, 高坂彰, 久保真由美, 他: 新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴う遠隔授業等の導入に係る現状や学習効果及び課題, 神奈川県立よこはま看護専門学校紀要, 13, 101-106, 2021.
- 22) 鳥越ゆい子, 小湊真衣, 望月崇博, 青木直樹: 現代学生のコロナ禍における非対面授業への意識 - 対面授業と非対面授業それぞれのよさ -, 帝京科学大学紀要, 17, 145-151, 2021.
- 23) 宮越幸代, 太田克矢, 森下孟: 2010年度に配信した遠隔授業「国際看護学」の実践報告-授業のシステム運用と授業運営に対する考察-, 長野県看護大学紀要, 14, 99-111, 2012.
- 24) 毛利聖子: 看護学生の「医の歴史と倫理」の授業からの学び, 日本看護倫理学会誌, 8(1), 25-31, 2016.
- 25) 清塚智明: 看護基礎教育における看護倫理学の現状, 八戸学院大学紀要, 56, 127-131, 2018.

